

愛する日本と日本人へ

― 内村鑑三の二一世紀への「遺物」 ―

内村鑑三と『後世への最大遺物』

内村鑑三（一八六一―一九三〇）に『後世への最大遺物』という小著がある。二〇世紀の夜明け前、まだ三〇歳を出て間もない内村が、箱根で開催されたキリスト教青年会の夏期学校で行った講演の記録である。

彼は言う。人たる者この世に生まれたからには、何か後世に遺し、この世を少しなりと良くして去るべきである。名誉でも、富でも、あるいは事業でもよい。しかし、これらのものは誰もが遺せるというものではない。ここにただ一

つ誰でも、どんな人でも遺すことのできるものがある。それはへ勇ましい高尚なる生涯である。これこそが人生の意義であり、幸福であつて、すべての人がひとしく遺し得る後世への最大遺物である。

身近な実例をたくさん引いて、高い理想と強い信念に温かいユーモアをまじえながら、説き去り説き来るこの一篇の講演は、実に今日に至るまで長く多くの人々、特に青年たちに読みつがれて、感動を与え、人生への希望を喚起してきた。

内村鑑三は一八六一年、高崎藩士の家に生まれた。彼が初めて英語に接したのが一二歳で、

その翌年一八七三年（明治六年）に切支丹禁制が撤廃されたというから、彼は正に近代日本の誕生とともに人と成ったのである。

一七歳の秋、札幌農学校（北海道大学の前身）に第二期生として入学。『Boys, be ambitious』の名言をもって知られる教頭キャプテン・クラークは既に去っていたが、その感化によって初めてキリスト教に接し、新渡戸稲造ら多くの学友達と共に「イエスを信ずる者の誓約」に署名した。

同校卒業後、北海道開拓使勤務を経て、二四歳から二八歳にかけて四年間アメリカに留学、主としてニュー・イングランドのアマスト大学に学び、理学士の称号を得て卒業した。在学中に総理 J・H・シーリーの教導によってキリスト教の回心を経験し、福音信仰を与えられて歓喜したことは、よく知られたところである。

帰国した内村は教育およびジャーナリズムに携わったが、そのいづれにも失望、挫折し、四〇歳に至ってついに、米國留學中から密かに抱いていた計画である、聖書の研究と伝道の雑

誌『聖書之研究』の刊行を実現した。奇しくも、今からちょうど百年前の一九〇〇年九月のことであった。ここに彼はそのライフ・ワークを見出し、以後永眠までの三〇年間一貫して、ひたすらに聖書を研究、講義し、キリストの福音を伝えて倦むことがなかった。三五七号に達した『研究』誌を主とする彼の著作は、今なお各種の『内村鑑三全集』あるいは単行本として、広く日本人に、のみならず外国人にも読まれている。

二〇世紀の夜明けとともに天職に就き、その世紀の三分の一を生きた、この近代日本の代表的思想家、先駆的プロテスタント・クリスチャン内村鑑三は、いま二一世紀に向かって生きようとしている私ども日本人に、果たして何を彼の（後世への最大遺物）として遺そうとしているのか。いやむしろ、私どもは彼からどのような「遺物」を受け取るべきか。

このような観点に立って、内村が彼の愛して止まない日本と日本人へ遺した物（言葉）を、三つの鍵語キーワードに依って考えてみたい。

へ二つのJへ―内村の愛国心

内村鑑三は、何であるよりもへひとりの日本人キリスト者へであった。そのことを最も端的に示すのが、その告白を含むへ二つのJ（イエスと日本）へという文章である（英文、以下英文には末尾に訳者名を記してそのことを示す）。

わたしは二つのJを愛する、その他を愛さない。一つはイエス(Jesus)、一つは日本(Japan)である。

わたしは、イエスと日本の、どちらをより愛するか知らない。

イエスのため、わたしは「彼の父」以外のいかなる神をもわが神、わが父と認めることはできない。また日本のため、外国人の名において来るいかなる信仰をも受け容れることはできない。飢えよ、来たれ。死よ、来たれ。わたしはイエスと日本を手離すことはできない。私は断固としてひとり・の・日・本・人・キ・リ・ス・ト

者である。

イエスと日本、わたしの信仰は一つの中心をもつ円ではない、それは二つの中心をもつ楕円である。わたしの心情と知性は、この二つの親しい名前のまわりを回転する。そして一方が他方を強めることを知る。イエスは、日本に対するわたしの愛を強め清める。日本は、イエスに対するわたしの愛を明確にし目標を与える。この両者がなかったならば、わたしは単なる夢想家となり、狂信者となり、漠然たる一般人となったことであろう。

イエスはわたしを世界人とし、人類の友とする。日本はわたしを愛国者とし、それを通して固くわたしを地球に結びつける。わたしはこの両者を同時に愛することによって、狭くなりすぎることもなく、広くなりすぎることもないのである。（道家弘一郎訳）

これを内村のナシヨナリズムと呼ぶとすれば、彼のナシヨナリズムは「楕円の真理」（晩年の彼にこの題の一文がある）に支えられ



*I for Japan;
Japan for the World;
The World for Christ;
And All for God.*

ている。「イエス」という一つの中心は、もう一つの中心である日本の自己完結的文化を開放し、日本人の独善的愛国心を相対化する。「日本」という個別は全体性（インターナショナル）を獲得し、特殊（ローカル）は普遍（グローバル）へと高められるのである。

二つの中心のあるところ、必然的に絶えざる葛藤があり、激しい戦いがある。当然厳しい自己批判も求められるだろう。次の「日本道德の

欠陥」という文章は、その一例である。

日本道德の最も顕著な欠陥のひとつは、目上の人に対する目下の者の義務を教えることがあまりに多く、目下の者に対する目上の人

の義務は、かりに教えることがあったとしてもあまりに少ないことである。日本道德の二大原則である忠と孝とは、臣下の主君に対し、子の親に対する、すなおな服従以外のなにものでもない。貞とは妻の夫に対する節操、もう一つの悌とは年下の年上の人に対する服従である：：われわれは上にむかつては束縛され、下にむかつては自由である。頭はがんじがらめで、足は勝手しない。このような原則の上に建てられた社会は、どうしてもたいそう不安定にならざるをえない。

こういう社会の在り方から、ひとつ重大な疑問が生じてくる。人民が自分の個人的価値を重んずるところに成り立つ現代の代議政体は、日本のような構造の国で、多少とも長期にわたって効力をもつことが期待できるだろうか。

このあと彼は、日本の議会はほとんど議会と呼びえない」と批判し、

議会とは、必要とあらば君主の意志に反して人民の意志を表現するものなのだ。人民の内なる伝統的な道徳と、彼らが自身のために採用した立憲政治という外的な衣裳とをいかにして適合させるか——これは日本が解決を求められている最も困難な問題のひとつに違いない。内が外を抑えるか、外が内を変えるか。世界はかたずをのんで見守っている。

(亀井俊介訳)

と結んでいる。一世紀前の文章である。

内村がここに指摘した日本道徳の欠陥が、そのまま現代の日本人の問題であることは言うまでもない。例えば、戦争責任の問題を論じるとき、なぜ日本人は被害者意識だけが強くて、加害者としての責任に思い至り得ないのか。そもそも、天皇をはじめとする戦争遂行者の責任を自らの手をもって追及し、裁くことができなかつたのはなぜか。声高に民主主義を唱えながら、なぜ日本人はいつまでも事大主義を脱し得ず、主権者意識に乏しいのか。日本社会のいずこにも見られる強者追随、弱者排除の構造はどうか。こうした私どもの心性メンタリティは、正にここに内村が批判した「日本道徳の欠陥」の露呈にほかならないのではないか。

ところでは、これほど情報化が進んだ時代になってもなお日本は、特に文化的・精神的な面で、受容一方で発信不足ではないかと批判されているが、内村はこの点でも先覚のひとりであった。晩年に(一九二六年)、自ら主筆となって英文雑誌を刊行したが、その発刊の辞にこう言っている。

『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』は、われわれが日本の最善と思うものを世界に紹介し、そうして、世界の思想と世界の進歩に少しでも貢献しようとする企てである。（道家訳）

それでは、日本は世界に対して何を貢献するか。いや貢献すべきであろうか。内村の言うところを聞こう。

日本は、アジアの東端で領土をさらに拡張する見込みがあるから、さらに偉大なのではない。人道ヒューマニティに対するさらに大きな奉仕、自国の使命のさらに完全な達成、さらに高度な美德とさらに高貴な文明によって、日本はさらに偉大になるのである。他国が甲鉄鑑や地球をとりまくほどの領土を栄光と考えるとき、自国の高潔さを信じて道徳の領域で偉大であることができるならば、日本にこそ栄光はあるのである。

あらゆる征服のうちで最も偉大な（そして

最も有利な）征服は、意志と精神に対する征服である。島国的位置を占める日本は、山岳の要塞に位置するスイスに似たものたることができる。つまり、統一した種族の模範、東洋に対する西洋の先駆け、西欧に対する東洋の代弁者たりうるのである。（亀井訳）

内村の先見は裏切られ、日本は（甲鉄鑑）（軍事力）や（領土）をもって偉大になろうとして挫折した。幸いにもその教訓に学んで平和国家として再出発した筈だが、いつしか経済一辺倒に墮し、「一國平和主義」の惰眠をむさぼるに至っているのが現状ではないか。「国際貢献」とは何か。自衛隊の派遣か。何をもって（世界の思想と世界の進歩に少しでも貢献しようとする）のか。円の札束をもってか。いやそうあつてはなるまい。内村は今なお、いや今こそ、（自国の高潔さを信じて道徳の領域で偉大であること）をもつて、それをなせと私どもに訴えている。（日本は世界のものではない）ことを肝に銘

じて、日本を愛するように世界を愛せよと。

られることは束縛である。

(道家訳)

世界と日本

〈非戦論〉——内村の平和思想

世界の日本である。日本の世界ではない。日本は世界のためである、世界は日本のためではない。

日本の偉大さは、自分の利益を世界の利益に従わせなければならぬことを十分に認識することにある。

世界が善くなれば、日本も善くなるであろう。世界が悪くなれば、日本も悪くなるであろう。

日本の福祉は世界の福祉と最も密接に結びれている。世界の連帯性がますます増大しつつある現代において、他のすべての国々を犠牲にして

一国を大きくしようとの考えは愚の骨頂である。

他に仕えることこそ自由である。他に仕え

近代日本は一九四五年の大崩落に至るまで、実に十年おきに戦争をしてきた。内村はその生涯の中で三つの戦争を経験している。日清、日露の両戦争と第一次世界大戦である。彼が「ひとりの日本人キリスト者」として、戦争と平和に深甚な関心を抱いたのも当然である。

よく知られているように、日清戦争において内村は義戦論者であった。英文で「日清戦争の義」を綴り、「吾人は信ず、日清戦争は吾人にとりては実に義戦なりと。その義たるの、法律的にのみ義なるにあらずして、倫理的にまたしかり。……吾人は永久の平和を目的として戦うものなり」と、世界に向かって訴えた。

しかし現実には彼の主張に反して、それは「義戦」として始まったが、「欲戦」として終わった。彼は「わが国の義を世界にむかって訴えしを、深く心に恥ずる者である」と告白せざるを得な

かった。この彼の憤慨と悲しみを詠んだのが、次の一篇の詩である。

寡婦やもめの除夜

明治二十九年（一八九六年）の歳末、
軍人が戦勝を誇るを憤りて詠める

月清し、鼻白し
霜深し、夜寒し
家貧し、友少なし
歳尽きて、人帰らず
思いは走る西の海
涙は凍る威海湾
南の島に船出せし
恋しき人の跡ゆかし

人には春の晴れ衣
軍功いくさごころの祝い酒
われには仮りの侘わびび住まい
ひとり手向くる閼伽あかの水

われ、むなしゆうして人充みち
われ衰えて国栄ゆ
貞めいを冥途いじどの夫つまに尽くし
節を戦後の国に全うす

（第一段の繰返し）

こうして内村は、十年後の日露戦争（一九〇四〇五）の開戦前夜には、今日すでに平和思想の古典的文章となっているあの「戦争廃止論」をもって、非戦論者として立ち上ったのである。

余は日露非開戦論者であるばかりでない、戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうして人を殺すことは大罪悪である。そうして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。世の正義と人道と国家とを愛する者よ、来たって大胆にこの主義に賛成せよ。

へこの主義へ即ちへ絶対的非戦主義へを唱えて
彼は言う。

聖書の、ことに新約聖書の、この事に関し
て私どもに命ずるところはただ一つでありま
す。いかなる場合においても剣をもつて争わ
ないことであります。万、やむを得ずんば敵
に譲り、あとは神の怒りを待つことでありま
す。この態度を取るの難易は私どもの問うべ
きところではありません。絶対の平和は、聖
書の明白なる訓戒いましめでありまして、私ども、も
し神と良心に対して忠実ならんと欲すれば、
この態度を取るよりほかに道はありません。
世に「義戦」ありという説は、今や平和の
主を仰ぐキリスト信者の口へのぼすべからざ
るものであります。私自身は今絶対的非戦
論者であります。
平和は決して、否、決して戦争をとおして
来たりません。平和は戦争を廃して来たりま
す。武器を擱おくこと、これが平和の始まりで
あります。

ここに内村の非戦・平和主義は尽きているが、
一、二のことを付け加えれば、彼は非戦主義に
なった由来を述べて、自分の生涯に実験した
へ無抵抗主義の利益と、へ過去十年間の世界
歴史とを挙げている。彼の平和思想が決して
哲理や宗教的信念だけに基づくものでなく、人
生経験と社会・歴史的考察に基づく甚だ堅実な
ものであったことを示している。それかあらぬ
か、このころ既にへ人類の進歩とともに戦争の
害も増し加わり、戦争は勝っても負けてもその
目的を達することはできないと論じ、平和主
義はへなにも今日直ちに兵役を拒み、軍事に反
対するということではなく、むしろへ戦争の
非理と損害とを唱え、万国共通してこれを廃止
し、これに代うるに仲裁裁判をもつてせんとす
ることとを提唱している。
一方で、彼はへ戦時における非戦主義者の態
度とを説いて、一見非戦論の後退とも目される
ことを言っている。

逝ゆげよ、両国の平和主義者よ、行いて他人

の冒さざる危険を冒せよ。行いて、なんじらの忌みきらうところの戦争の犠牲となりて倒れよ。戦うも、敵を憎むなかれ。そは敵なるものは今はなんじになければなり。ただ、なんじの命ぜられし職分を尽くし、なんじの死の、贖罪しよくざいの死たらんことを願えよ。人はなんじを死に追いやりしも、神は天にありてなんじを待ちつつあり。そこに、敵人と手を握れよ。ただ死に至るまで平和の祈願をなんじの口より絶つなかれ。

これは「非戦主義者の戦死」と題する文章の一段落だが、平和論からすればこのような考え方は明らかに「国家への屈服」であろう。その点ではつとに問題にされ、批判・修正もされてきたが、この深刻極まりない「良心的戦死」といふべきものの宣言は、世界にも類を見ないであろう」（阿部知二）。

第一次世界大戦（一九一四―一八）は、内村（の非戦・平和主義）に甚大な衝撃と失望を与えた。それはキリスト教国挙げての大戦争であ

り、教会また一斉に賛成し、米国までが参戦するに至った。内村は叫ばざるを得なかつた。

戦争は悪事であると同時に刑罰である。負ける戦争ばかりではない。勝つ戦争もまた刑罰である。国家は戦争に従事して、負けるも勝つも、神の刑罰をこうむりつつあるのである。

日清日露の二大戦争は、日本の側がわより見れば、三百年前の太閤秀吉の朝鮮征伐の刑罰として日本国民に臨みしものであるとの、ある朝鮮通の言は、その中に深い真理を宿すものであると思う。

今回の欧州大戦争は、欧州人の上に臨みし神の厳罰と見るが適当であると思う。

内村はここに改めて「戦争廃止に関する聖書の明示」を学び、非戦の唱道は絶えず為すべきであるが、戦争はそれによってやむのではなく、ただキリストの再臨のみ世界の平和を可能にするという希望を語るに至る。

聖書の明白に教うるところに従えば、戦争は人の力によつては、やまるべきものではない。戦争は神の大能の実現によつて、やむのである。戦争廃止は、神がご自身の御手に保留したもう事業である。これは、神の定めたまひし、世の審判者さばきびとなるキリストの再臨をもつて実現さるべき事である。

キリストのみが、真の平和主義者である。絶対的平和を唱えて、完全にこれを実行し得る者である。ゆえに彼の降臨を待たずして、世に平和はおこなわれない。世界の平和はひつきようするに、キリストの再臨を待つて初めて世におこなわるるものである。

そして政治的には次のような重大な提案をもしつゝ、真の平和はいかなるものであるかを説いている。

戦争は最大の悪事である。ゆえに他国の戦争を廃するを待たずして、みずから進んでそれを廃すべきである。みずから剣を鞘さやに収め

ずして、他に兵器の放棄を要求するも、効果なきは明白である。戦争は相談の結果廃するあたわず、みずから独ひとりこれを廃すべきである。

そうして神がその御子イエス・キリストをもつて臨みたまふところに必ず平和があります。まず人の心に、次にその家庭に、進んで社会に、国家に、世界に、確實なる平和が臨みます。これは外面の、暫時的の平和ではありません。人のすべて思うところに過ぐる、深き、永久的の平和であります。ゆえに私どもは、平和運動の最も確實なる手段として、福音宣伝に従事します。

以上の内村の平和論は、彼の永眠の四年前に雑誌『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』に掲載された英文の論説「新文明」において総括されることになる。

ユダヤ人イザヤのヴィジョンは次のように

あつた(イザヤ書二章四節、一一章六、九節)。

このヴィジョンは、戦争のない世界というヴィジョンであつた。文明がもし何らかの意味をもつとすれば、文明とはこの戦争のない世界の状態でなければならぬ。艦隊と軍団に守られてのみ存在する文明などというものは異常そのものである。それは文明ではなく、純然たる野蛮である。

「非現実的なまぼろしにすぎない」と、あなたがあつたは言うだろう。しかし、あなたがたのいう武装した文明というのは、現実的であつたか。みずからその非現実性を証明したのではなかつたか。むしろ、武装しない平和こそ、唯一可能な平和ではないのか。かつての日本の武士は、勅令によつて刀を奪われたとき、非常な不安を感じた。しかし一度この攻撃と防御の武器を奪われてみると、かえつて以前よりも安全を感じたものである。

なるほど日本は西洋的な戦闘方法の採用によつて、一世紀もたないうちに世界の列強に伍する地歩を占めた。だが失つたものは何

であつたか。三回たてつづけの戦勝によつて、日本は台湾と朝鮮と南洋群島を得た。しかし、それとともに全世界の愛を失つた。いまや全世界は日本に向かつて閉じ、日本の国民はいたところで恐れられ嫌われている。

今こそ、日本は眠りから醒めるべきときである。膨大な軍事予算をとまなうこの西洋文明は、完全に放棄されなければならぬ。日本は新しい文明を、真に文明であるところの文明を始めなければならぬ——それは戦争のない文明である。

わが日本が国家的宣言を發して、五十年前武士の武装解除を宣言したように国家の武装解除を宣言し、こうして全世界に新文明を招来しうるなら、それはなんとすばらしい日であらう。

(道家訳)

これは、内村の死から七〇年の現在の日本に向けられた、何という適中せる予言であり、適切な警告であることか。

日本は彼の死の直後十五年戦争に突入した。

彼の非戦論を継承した人々が無いではなかったが、日本人の大勢がこの「新文明」論に動かされることはなかった。しかし、「五十年前」の敗戦は日本に、大いなる摂理の強制ではあったが、「国家の武装解除を宣言」させた。日本人は歓呼して「平和憲法」を迎え、これに生きてきたおかげで、近代日本としては稀有の半世紀にわたる平和を享受してきた。にもかかわらず、この世紀末に至ってまたもや、このような憲法は「非現実的なまぼろしにすぎない」とさかしらな議論を始め、世界へいたるところで恐れられ嫌われ「始めているのではないか」。

悲しいかな内村の鋭い洞察はまたもやこの現実を見通し、日本人は「今こそ眠りから醒むべきときである」と警告し、翻って「金世界に戦争のない新文明を招来し」ようではないかと呼びかけている。

「平民」—— 内村の民主主義

内村の愛した言葉の一つに「平民」がある。

「平民」という語は今ではもう耳慣れないものになってしまったが、内村は生涯にわたってこの語を使っている。その最初の用例と思われるのは「A Plain Citizen」という英語の短文で、その中に「heimin (common citizen)」とある。そしてその死の三か月前の日記に、彼は「自分はイエス・キリストのしもべである。ゆえに平民である」と記している。

彼は様々な人々を平民の例として挙げているが、その中に日本人は殆ど含まれていない。日本人には、彼の考える平民の資質がまだ涵養されていらないからであろうが、ここに内村の「平民論」の価値があると言えよう。では平民とは誰か。彼にとって真の平民、平民の中の平民は、言うまでもなく、イエス・キリストその人であった。

イエスは平民である。余は平民の模範として彼を仰ぎまつる。

イエスは平民であると言わんよりも、むしろ平民とはイエスのごとき者と言うべきであ

る。すべてイエスを主として仰ぐ者、故に罪をあがなわれんとする者、これみな平民である。すなわち神の子としての貴尊を認むるほか、その他の貴尊をことごとく拒否する者、これが真正の平民である。

余の敬慕するキリストは、大工の子なるナザレのイエスである。労働を愛し、天然を愛し、嬰兒を愛し、学校に学ばずして常識に富み、帝王の宮殿に招かれんよりは税吏と罪人との招待にあずかるを喜ばれし彼は、実に理想の平民である。

彼によれば、こうして真の「平民主義」はイエスとともに世に來たものであり、従つて、イエスによらなければ人は平民になることはできない。へ何びともイエスに近づけば近づくほど、真個の平民たらざるを得ないのである。

それでは平民とはどのような人か。彼に包括的な平民の定義はないが、幾つかの文章の中からそれらしきものを拾つてみよう。

余輩の理想は貴族ではない。平民である。教職ではない。平信徒である。余輩はいかなる意味においても「特別の人」とならんと欲しない。神は預言者エゼキエルを「人の子」と呼びたもうた。余輩もまた神にも人にもかく呼ばれんことを欲する。「人の子」、「人類の一人」、これにまさりて貴い称号はほかにない。

余が自身その一人たらんと欲する平民は、「人らしき人」である。人として価値ある者である。地位とか勲章とか学位とか所有もちものとかいうものを全然離れて、人たるの価値を有する者である。余の言う平民は「靈魂の人」である。内に足りて外に求めざる者である。真個の価値を赤裸々の靈魂に有して、これを飾るに位階、勲章の金箔をもつてするの要なき者である。

肉体より離れたる靈、神の前に独ひとり立つた裸体のわれ、これが平民の本体である。キリストの十字架をもつてあがなわれし罪人、これが平民の完全に達したる者である。

次に引くのは格別に平民を論じたものではないが、（平民的言語）と称して英語を愛した内村らしい“*soul*”論議で、平民の最良の定義になつているといえよう。

ソールそのものを言いあらわす（日本）語の吾人にあるなし。これを靈魂と訳して、その内に明らかなる個人格（ペルソナリティ）を発見するあたわず。

魂はくにあらず、魄はくにあらず、精にあらず、神にあらず、ソールはソールにして、これを他の英語に訳すれば *individual*（*individable*）すなわち分かつべからざるものなり。すなわち心霊界のアトムにして、これをこぼつ力あるなく、これを割きくの利刀あるなし。すなわち吾人各個の自由の存するところにして、人類の特権の附着するところを言うなり。民族の自由観念は彼らのソールの定義より来たりしものなり。彼らの称する個人主義なるものは、現今わが国において伝えらるるがごとき利己主義と称とうるものにあらずして、ソール主義を言うなり。A MAN. 人一人、永久

不滅のもの、他人の干渉しあたわざるわが心中の一物、すなわち自我そのもの、帝王にも宿りてまた乞食こっじきにも宿るもの、これソールなり。人の人たるの真価は彼の有するソールにあり。人命の貴重なるは、その内にソールなる靈物に宿ればなり。ソール、ソール、われにわがソールの特権を与えよ。しからざればわれに死を与えよ。

こうして、平民とはへ神と自力とのほかには何ものにもたよらざるへ自主、独立の個人（インディビジュアル）のことであり、彼こそはへゼントルマンかつデモクラットである。平民はへ平民の宗教へに生き、へ平民の書なる聖書へを学び、へ静肅なる勤勉へをもつて日々の労働に従事する。彼はへ純粹なる平民である天然へを尊び、へ普通のもの愛しへ、へ普通の生涯へを送ることを、無上のへ特権また幸福へとする。へ神は平民を愛するへゆえに、彼もへ平民のために尽くすべきでありへ、へイエスと共に万民、殊に下民（弱者）を友とする心掛けへが大切である。それゆえ教

育の目的は、へ善き平民を育つる事へにこそあるべきである。

では政治についてはどうか。内村はへキリスト教的政治は平民的政治なり」と言つて、ここでも平民主義を貫く。彼の生涯について言えば、彼はいわゆる「不敬事件」へ一八九一年、教育勅語奉戴式において明治天皇宸署の教育勅語に対し敬礼しなかつたとされるで第一高等中学校を追われたのちは、二度と官に就くことなく終生在野の人として生きた。彼は決して反体制ではなかつたが、徹底して非体制であつた。そのへ平民思想へによるものであつたことは言うまでもない。

ここで彼が珍しくへ歌について語つてゐることを聞こう。この題の一文からの引用だが、何と百年前に書かれたものである。

国民の歌う歌によつて、その文明の程度はよくわかる。その国民の常に歌う歌が、その道德の標準である。歌は国民理想の表示である。それと同時にまた歌は国民に理想を供す

るものである。ああ、わが日本国よ、なんじはいかなる歌を歌いつつあるか。

いずれの国にも国歌なるものがなくてはならない。しかし、わが日本にはまだこれがない。「君が代」は天子の徳を賛^{たた}えるための歌である。国歌とは、その平民の心を歌うものでなくてはならない。国は実はその平民の所有であつて、貴族の所有ではないから、国の理想はその平民の中にあつて、貴族の中にはない。平民の心を慰め、その望みを高うし、これに自尊自重の精神を供する歌が、日本国民の今日最も要求するところのものであると
思う。

これに続けて彼は、国歌は平民にふさわしく高尚で、強健な美しさをもち、へ平民歌であるから当然労働歌でなくてはならない」と主張している。

国民的討議もないままに「日の丸・君が代」が国旗・国歌として法制化され、その掲揚、斉唱が疑似愛国心の踏み絵とされかねない現状を

見るとき、この内村の洞察力と先見性に驚かざるを得ない。

内村はその死のちょうど一年前（一九二九年四月五日）、日本の政治的風土のおよそ平民的でないことを嘆いて、日記に次のように記したのであった。

日本国は今なお依然として官尊民卑のお役人国である。この国では官吏に成らざれば幅が利^きかない。日本人は口では独立だの民主主義だのと唱うるけれども、実は彼らにとり政府ほど安心で有利な所はないのである。ゆえに何びとも官吏の地位にかじり付かんとする。政党が政権を離れ得ず、反対党が倒閣運動に熱心なるも、みなこれがためである。日本人はいまだ純平民たるの尊さを知らない。爵位をもちうて、うれしがるような小児である。こんな国民に独立的キリスト教を与えんとして生涯を送りし自分の馬鹿さ加減をあわれまざるを得ない。

ところで内村が（平民）を自らの思想としてつあつた頃（一八九七年）の文章に、この項の始めに指摘した“*A Plain Citizen*”とともに、“*The Spirit of Republicanism*”という英文がある。その冒頭に彼は言う。

共和主義の精神とは、個人が自己の価値を尊重する精神である。その本質において、それは最も高貴で純粋な形の自己尊重に他ならない。∴∴いかなる国家も、国民の間に適度の共和主義的感情なくして栄えたためしはない。（亀井訳）

その言うところは、（自己尊重）こそが平民の精神的中核だということである。彼は、日本人の中で唯一人（平民）なりとした人物を、（デモクラット）とも呼んでいるのだが、そのことはとりもおさず、彼の言う平民の思想なくして民主主義は成り立たないということである。なぜなら民主主義は、真に（自己の価値を尊重する）個々人が、自ら国政に参与する自覚

をもつ国民として、自由に平等に、互いに市民的連帯をもって生きるときに現出する理念であり、制度だからである。

ここで内村の「平民」に当たる現代の言葉は何かと考えてみると、残念ながら他の日本語にはなくて、むしろ英語の "people" を当てるのが一番適当のように思われる。「ピープル」は「普通の人々」であるが、彼らこそ民主主義の担い手であり、歴史の形成者である。

「日本国憲法」における「国民」は、英訳ではすべてこの「ピープル」である。その前文には「日本国民」または「国民」が八回も出てくるが、これはすべて「ピープル」である。この日本のピープルが「主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定した」のであり、第九条の平和条項は日本のピープルが主権者として国権に対して課した制約なのである。

こう考えてくると、この「ピープル」が正に内村の「平民」に対応すると思うのだが、ただ一つ大きく違う点は、「ピープル」は集合概念であるということである。その意味では、ピ

ープルは日本語では「民衆」に当たると言うべきだろう。そしてその関連で言うと、「平民」は「民衆」の個々人の精神的実質を指すものと理解しうる。すなわち平民の本体は「soul」であり、「霊の人」に他ならず、それゆえにこそ、人を真に平民になし得るのは真の平民であるイエス以外にないのである。内村が繰返し強調したところである。

今更言うまでもなく、日本国憲法の、特にその平和主義における、空洞化は甚だしい。それは言わば、日本国憲法を制定した日本人の、ピープルとしての空洞化がもたらした結果である。内村に言わせれば、「平民は決して多数ではない」。少数である。民衆は決して平民ではないのである。

内村の平民の思想には、日本のピープルをして真のピープルたらしめる精神が横溢している。残念なことに、それこそが現代の日本人に最も欠けているものである。その精神による個の確立なくして、日本人はどうして真の「責任ある自己」となり、実体あるピープルに

なることができるか。それなくしてどうして、幼稚な集団志向や、隠微な上下関係や、内と外の二重倫理（仲間うちには仲良し、よそ者には無関心）などを克服して、人権と民主主義が尊重される成熟した市民社会を形成し、地球規模のピープルの連帯を生み出すことができるだろうか。そしてその民衆的連帯なくしては、もはや世界の平和も、地球環境の保全も、人類の生存さえも有り得ないということは、今や明白な事実となりつつあるのではないか。

内村鑑三の〈後世への最大遺物〉

二一世紀の日本への内村の〈遺物〉として、彼の愛国心と、平和思想と、民主主義とを考えしてみた。そのいずれも、いまなお十分に有効であり、かつ未来的展望を開くに価するものであることは、疑い得ないだろう。にもかかわらず、その〈最大遺物〉はと言え、彼の場合もまた、彼自身の〈勇ましい高尚なる生涯〉そのものである、と言わなければならぬ。

その生涯は、一九三〇年三月二八日早曉に閉じられた。息子祐之の伝えるところによると、彼の最後の祈りは以下のごとくであった。

宇宙万物人生（じんせい）悉く可なり。言わんと欲する事尽きず。人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る。

内村が眠る東京・多摩霊園の墓石には、彼がアメリカ留学時代から用いていた聖書の見返しに、〈To be inscribed upon my Tomb. わが墓碑銘として〉と書かれていた次の言葉が刻まれている。

I for Japan;

われは日本のため、

Japan for the World;

日本は世界のため、

The World for Christ;

世界はキリストのため、

And all for God.

そしてすべては神のためなり。

〔内村鑑三の著作〕

一 『内村鑑三全集』全四〇巻（岩波書店、一九八四年）

二 『内村鑑三英文論説翻訳篇』上下二巻（岩波書店、一九八五年）

三 『内村鑑三（一）聖書注解、（二）信仰著作、（三）日記書簡、（四）英文著作全集』全五七巻（教文館、一九七三年）

（本稿の引用（文中は（ ）は二および三の（二）と（三）によった。）

（二〇〇〇年四月記）

（所載） 「青山学院と戦争の記憶」

二〇〇〇年八月

青山学院大学プロジェクト 95・

雨宮剛編